

日蓮大聖人御書全集

おとごぜんごしようそく

乙御前御消息

新版
1686
S
1692

おとごぜんごしようそく

乙御前御消息

けんじがんねん

建治元年(75)

8月4日

にち

きい

にちによう

おとごぜん

54歳

日妙・乙御前

かんど

ぶっぽう

渡

そうちら

とき

きんこう

ご

漢土にいまだ仏法のわたり候わざりし時は、三皇・五

帝・三王、乃至太公望・周公旦

こうし

造

たま

老子・孔子つくらせ給い

そうちら

ふみ

けい名

てんとう

て候いし文を、あるいは経となづけ、あるいは典等となづ

ふみひら

ひとれいぎ

教

ふぼ

知

く。この文を披いて、人に礼儀をおしえ、父母をしらしめ、

おうしん

さだ

よ治

ひと

隨

ふぼ

知

王臣を定めて世をおさめしかば、人もしたがい、天も納受を

まつも

たも

こ違

ひと

のうじゅ

もうもの

もう

しん

たれ給う。これにたがいし子をば不孝の者と申し、臣をば

ぎやくしん

もの

とが

当

がつし

ぶつきょう

逆臣の者とて失にあてられしほどに、月氏より仏經わた

りし時とき、ある一類は「用うべからず」もちと申し、ある一類は「用うべし」もちと申せしほどに、あらそい出来して召し合わせたりしかば、外典の者負けて仏弟子勝ちにき。その後は、外典の者と仏弟子を合わせしかば、冰こおりの日にとくるがごとく火の水に滅するがごとく、まくるのみならず、なにともなき者となりしなり。

また仏經漸くわたり來りしほどに、仏經の中にまた勝劣しようれつ・浅深せんじん候そうらいけり。いわゆる、小乘經・大乘經だいじょうきょう、顯經・密經みつきょう、權經ごんきょう・實經じつきょうなり。

譬えば、一切の石は金に對すれば一切の金に劣れども、
また金の中にも重々あり。一切の人間の金は閻浮檀金
には及び候わず、閻浮檀金は梵天の金には及ばざるがご
とく、一切経は金のごとくなれども、また勝劣・浅深あ
るなり。

小乗經と申す經は、世間の小船のごとく、わずかに
人の一人三人等は乗すれども、百千人は乗せず。たとい
二人三人等は乗すれども、此岸につけて彼岸へは行きがた
し。またすこしの物をば入るれども、大いなる物をば入れ
少 もの い おお もの い

がたし。大乗と申すは大船なり。人も十・二十人も乗る上、
おお
大きいなる物をもつみ、鎌倉よりつくし・みちの国へもいたる。
じっきょう
実経と申すは、また彼の大船の大乗経にはにるべくも
おお
なし。大いなる珍宝をもつみ、百千人のりて、こうらいな
おお
んどへもわたりぬべし。一乗法華経と申す経も、またか
くのぞ」とし。

だいじょう もう たいせん
ひと じゅう にじゅうにん の うえ
提婆達多と申すは閻浮第一の大悪人なれども、法華経に
だいばだつた もう えんぶだいいち だいあくにん
てんのうによらい
して天王如来となりぬ。また阿闍世王と申せしは、父をころ
あじやせおう もう ちち 殺
せし魔王なれども、法華経の座に列なりて一偈一句の
ほけきょう ざ ほけきょう
いちげいつく

けちえんしゅ

りゆうによ

もう

じやたい

によにん

ほけきょう

結縁衆となりぬ。竜女と申せし蛇体の女人は、法華経を

もんじゅしりぼさつと

たま

ほとけ

成

文殊師利菩薩説き給いしかば仏になりぬ。

うえ
ぶっせつ

あくせまっぽう

とき

指

たま

その上、仏説には「悪世末法」と時をささせ給いて、末代

なんによ
いちじょうきよう

贈

たま

からふね

まつだい
そうちう

の男女におくらせ給いぬ。これこそ唐船のごとくにて候

いちじょうきよう

一乗経にてはおわしませ。

いつさい
いつさい

げてん
たい

されば、一切経は、外典に対すれば、石と金とのごと

いつさい
だいじょうきよう

けごんぎよう
だいにちきよう

かんぎよう
たい

し。また一切の大乗経、いわゆる華厳経・大日経・觀経・

あみだきよう
はんにやきようとう

もうもろ

きようぎよう
ほけきよう

たい

阿弥陀経・般若経等の諸の経々を法華経に対すれば、

ほたるび

にちがつ

かざん

ありづか

螢火と日月と、華山と蟻塚とのごとし。

きょう しょうれつ
ほけきょう ぎょうじや
あ
法華経の行者とを合わすれば、水に火をあわせ、露と風と
を合わするがごとし。犬は師子をほうれば 腸くさる。修羅
は日輪を射 奉 れば 頭七分に破る。一切の真言師は犬と
修羅とのごとく、法華経の行者は日輪と師子とのごとし。
氷は、日輪の出でざる時は、堅きこと金のごとし。火は、
水のなき時は、あつきこと 鉄 をやけるがごとし。しかれ
ども、夏の日にあいぬれば堅氷のとけやすさ、あつき火の
水にあいてきえやすさ。一切の真言師は、氣色のとうとげ

ちえ 賢 にちりん 見 もの かた こおり 持
みず 見 もの ひ いぬ 恐 いぬ へび 蛙
さ、智慧のかしこげさ、日輪をみざる者の堅き氷をたのみ、
水をみざる者の火をたのめるがごとし。
とうせい ひとびと もうここく 見 とき 傲
当世の人々の蒙古国をみざりし時のおごりは、御覽あり
限 もの
しょうにかぎりもなかりしづかし。去年の十月よりは、
いちにん
一人もおごる者なし。

にちれんいちにん
聞 来 もう
きこしめししように、日蓮一人ばかりこそ申せしが、よせ
てだにきたるほどならば、面をあわする人もあるべからず。
猿 合 ひと
ただ、さるの犬をおそれ、かえるの蛇をおそるるがごとく
なるべし。

しゃかぶつ おんつか

ほけきょう ぎょうじや

みなひとおくびょう

これひとえに、釈迦仏の御使いたる法華經の行者を、
いっさい しんごんし ねんぶつしや りつそうとう 増
われ そん

一切の真言師・念佛者・律僧等にくませて、我と損じ、

てん

憎

被

くに

ゆえ

みなひとおくびょう

ことさらに天のにくまれをかばれる國なる故に、皆人臆病

たと

ひ

みず

恐

き

かね

怖

きじ

になれるなり。譬えば、火が水をおそれ、木が金をおじ、雉

たか 見

たましい

うしな

鼠

ねこ

責

が鷹をみて 魂を失い、ねずみが猫にせめらるるがごとし。

いちにん 助

もの

とき

うべき。

いくき

だいしようぐん

たましい

たいしようぐん

臆

つわもの

軍には大將軍を 魂 とす。大將軍おくしぬれば、歩兵
いくき だいしようぐん たましい おとこ たましい おとこ たましい によにん によにんたましい
臆病なり。女人は夫を 魂 とす。夫なけれど、女人 魂

よ おとこ によにん

よにん

よ

なかわた

難

見

なし。この世に夫ある女人すら、世の中渡りがとうみえて
候に、魂もなくして世を渡らせ給うが、魂ある女人に
もすぐれて心中かいがいしくおわする上、神にも心を入
れ、仏をもあがめさせ給えば、人に勝れておわする女人な
り。

かまぐら そうら とき ねんぶつしやとう
鎌倉に候いし時は、念佛者等はさておき 候いぬ、法華経
しん ひとびと こうこうざし 有 無 しけい そうちら
を信ずる人々は、志あるもなきも知られ候わざりしか
ごかんき 被 さど しま なが
ども、御勘氣をかぼりて佐渡の島まで流されしかば、問い合わせ
とぶら ひと にょにん おんみ
訪う人もなかりしに、女人の御身としてかたがた 御志

ありし上、我と來り給いしこと、うつつならざる不思議なり。

その上、いまのもうで、また申すばかりなし。定めて神も
まばらせ給い、十羅刹も御あわれみますらん。

法華経は、女人の御ためには、暗きにともしび、海に船、

恐
守
詣
もう
さだ
かみ

おそろしき所にはまばりとなるべきよし、ちかわせ給えり。

らじゅうさんぞう

ほけきょう

わた
たま

びしゃもんてんのう

むりよう

のなか

羅什三藏は法華経を渡し給いしかば、毘沙門天王は無量の

つわもの

そうれい

おく

どうしようほっし

のなか

兵士をして葱嶺を送りしなり。道昭法師、野中にして

ほけきょう

読

法華経をよみしかば、無量の虎来つて守護しき。これもま

た、彼にはかわるべからず。

かれ

変

地には三十六祇、天には二十八宿まばらせ給う上、人に

かなら
ふた

てん

かげ

添

そらう

たも
うえ

ひと

は必ず一つの天、影のごとくにそいて候。いわゆる、一

どうしようてん
い

に

どうみようてん
もう

そ
う

かた

添

いち

をば同生天と云い、二をば同名天と申す。左右の肩にそい

ひと
しゅご

とが

もの

てん

過

て人を守護すれば、失なき者をば天もあやまつことなし。

いわんや善人においてをや。

みょうらくだいし
宣

かなら

こころ

かた

よ

されば、妙楽大師のたまわく「必ず心の固きに仮つて、
神の守り則ち強し」等云々。人の心かたければ、神のまば

かなら
まも
すなわ
つよ
とううんぬん
ひと
こころ
固

強

そらう

り必ずつよしとこそ候え。

おん

もう

いにしえ

おんこころ

もう

これは御ために申すぞ。古の御心ざし申すばかりなし。

それよりも今一重強盛に御志あるべし。

その時はいよ

とき

いよ十羅刹女の御まぼりもつよかるべしとおぼすべし。

ためし いまいちじゅうこうじょう おんこころぎし

強

思

例には他を引くべからず。日蓮をば、日本国の人よ

ためし

た

ひ

にちれん

にほんこく

かみいちはん

過

ゆえ

り下万民に至るまで一人もなくあやまたんとせしかども、

いちにん いちにん

過

今までこうて候ことは、一人なれども心のつよき故なる

思

べしとおぼすべし。

ひと ふね の せんどう 計 ごと

一つ船に乗りぬれば、船頭のはかり事わるければ一同に

いちどう

せんちゅう しょにんそん

み 強 ひと こころ

船中の諸人損じ、また身つよき人も、心かいなけば多く

おお

のう むよう

にほんこく

賢

ひとびと

の能も無用なり。日本国にはかしき人々はあるらめども、

たいしよう

ごと 拙

甲斐

いき つしま くか

大将のはかり事つたなければかいなし。壱岐・対馬、九箇

兵

なんによ おお

殺

國のつわものならびに男女、多く、あるいはころされ、あ

捕

うみ い

崖

落

るいはとらわれ、あるいは海に入り、あるいはがけよりおち

者

幾千 万

こんど 寄

しもの、いくせんまんといふことなし。また今度よせなば、

さき

似

先にはに入るべくもあるべからず、京と鎌倉とは、ただ

いき

つしま

さき

支度

壱岐・対馬のごとくなるべし。前にしたくして、いづくへ

逃

たま

とき

むかし にちれん

み

もう

もにげさせ給え。その時は、昔、日蓮を見じ聞かじと申せ

ひとびと

たなごころ

合

ほけきょう

しん

し人々も、掌をあわせ、法華経を信ずべし。念佛者・禅宗

ねんぶつしゃ

ぜんしゅう

までも南無妙法蓮華經と申すべし。

ほけきょう

能

しん

なんによ

かた

そもそも、法華經をよくよく信じたらん男女をば、肩に

担せ負

由

きょうもん

み

そうちううえ

にない背におうべきよし、經文に見えて候上、

鳩摩羅炎さんぞうもう

ひと

もくぞう

しゃか負

たま

くまらえん三藏と申せし人をば木像の釈迦おわせ給いて

そうら にちれん こうべ

だいかくせそん替

たま

候いしそかし。日蓮が頭には大覺世尊かわらせ給いぬ。

むかしいまいちどう おののおにちれん だんな

ほとけ

昔と今と一同なり。各々は日蓮が檀那なり。いかでか仏に成ならせ給わざるべき。

なん

たも

ほけきょう

敵

いかなる男をせさせ給うとも、法華經のかたきならば、
隨い給うべからず。

したが

たも

いよいよ強盛の御志あるべし。氷は水より出でたれ
ども、水よりもすさまじ。青きことは藍より出でたれども、
かさぬれば藍よりも色まさる。同じ法華経にてはおわすれ
ども、志をかさぬれば、他人よりも色まさり、利生もあ
るべきなり。

木は火にやかるれども、栴檀の木はやけず。火は水にけさ
るれども、仏の涅槃の火はきえず。華は風にちれども、淨居
の華はしほまず。水は大旱魃に失すれども、黄河に入りぬ
れば失せず。

だんみらおう もう あくおう がっし そう くび き 答

あくおう

がっし

そう

くび

き

答

檀弥羅王と申せし悪王は、月氏の僧の頸を切りしにとが
なかりしかども、師子尊者の頸を切りし時、刀と手と共に
いちじ お 一時に落ちにき。弗沙密多羅王は鷄頭摩寺を焼きし時、
ほつしゃみつたらおう けいはずまじ や とき
じゅうにじん ぼう 頭 破

十二神の棒にこうべわられにき。

いま にほんこく ひとびと ほけきよう 敵

敵

み ほる

今、日本國の人々は、法華経のかたきとなりて、身を亡ぼ
くに ほる し国を亡ぼしぬるなり。こう申せば、日蓮が自讚なりと、心
得 ひと もう にちれん じさん み ほる ここる

えぬ人は申すなり。さにはあらず。これを云わば、法華経
ぎょうじや い こと のち 合 ひと ほけきよう
の行者にはあらず。また、云う事の後にあえばこそ人も信
づれ。こうただかきおきなばこそ、未来の人は智ありけり
書 置 みらい ひと ち

知 そうち

とはしり候 わんずれ。

また 「身は軽く法は重し。身を死して法を弘む」とのべ

て 候えば、身は軽ければ人は打ちはり悪むとも、法は重け

れば必ず弘まるべし。法華經弘まるならば、死かばね還つ

て重くなるべし。かばね重くなるならば、このかばねは利生

あるべし。利生あるならば、今の八幡大菩薩といわわるる

ようにはいわうべし。その時は、日蓮を供養せる男女は、

武内・若宮なんどのようにあがめらるべしとおぼしめせ。

そもそも、一人の盲目をあけて候わん功德すら申すばか

にほんこく いつさいしゅじょう まなこ そうら

そうら

りなし。いわんや、日本國の一切衆生の眼をあけて候わ
ん功德をや。いかにいわんや、一闇浮提・四天下の人の眼
のしいたるをあけて候わんをや。

法華經の第四に云わく「仏滅度して後に、能くその義を
解せば、これ諸の天・人の世間の眼なり」等云々。法華經
を持つ人は一切世間の天・人の眼なりと説かれて候。
日本國の人の日蓮をあだみ候は、一切世間の天・人の眼
をくじる人なり。されば、天もいかり日々に天変あり、地も

いかり月々に地天かさなる。

つきづき ちよう 重

天の帝釈は、野干を敬つて法を習いしかば、今の教主
釈尊となり給い、雪山童子は、鬼を師とせしかば、今の三界
の主となる。大聖・上人は形を賤しみて法を捨てざりけ
り。今、日蓮おろかなりとも、野干と鬼とに劣るべからず。
当世の人にみじくとも、帝釈・雪山童子に勝るべからず。
日蓮が身の賤しきについて巧言を捨てて候故に、国既に
亡びんとするかなしさよ。また、日蓮を不便と申しぬる弟子
どもをもたすけがたからんことこそ、なげかしくは覚え候
え。

いかなることも出来し候わば、これへ御わたりあるべ
し。見奉らん。山中にて共にうえ死にし候わん。また乙
御前こそおとなしくなりて候らめ。いかにさかしく候
らん。またまた申すべし。